様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月２１日現在

研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2006～2009
課題番号：１８２５１０１３
研究課題名（和文）　グローバル化する国内政策下の社会的少数者・弱者アイデンティティ構築プロセスの研究
研究課題名（英文）　Study of Identity Construction Process among Minorities under Globally Influenced Domestic Policies

研究代表者
武井　秀夫（TAKEI HIDEO）
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：５０２２６９８２

研究成果の概要（和文）：
途上国の対社会的弱者政策は標準化されたものになりつつあるが、各国の固有の歴史を背景に、そうした政策が社会的弱者に与える影響は異なってくる。本研究では、チリ、パナマ、ブラジルの大都市に居住する先住民、障害者、貧困層について調査を行った。過去の強制を伴う政策は人々に今も負の影響を及ぼし続けているが、現在の政策を利用して集団的としての力を強めている集団もあり、そうした集団では自己組織化を可能とする基盤の存在が重要な役割を果たしていた。

研究成果の概要（英文）：
In recent years, minority policies of developing countries have become standardized on the whole. However, each state has its proper history and socio-cultural milieu different enough from others, which make different the impacts of policies on each minority group. This study was carried out among urban dwelling minority groups, such as ethnic minorities, disabled people, and people in poverty, in Chile, Panama, and Brazil. Policies which had implemented coercive and exclusive measures have left much negative influence on the minority groups involved, especially on slum dwelling poor. However, some groups have strengthened their collective political power through taking opportunities provided by them. For these minorities the existence of a group of identification larger than a family has played a decisive role, providing them of a social space wherein they organize themselves and take the initiative.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
２００７年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
２００８年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
２００９年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
年度			
総　計	17,100,000	5,130,000	22,230,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学
キーワード：文化人類学、少数者研究、医療研究、開発研究

１．研究開始当初の背景

外交交渉や援助の見返り、国際社会での地位の確立などさまざまな場面で、人権政策や社会福祉政策の改善が取引材料となるようになり、グローバリゼーションの波がいわゆる開発途上国の国内政策にも及んで、途上国内の社会的少数者・弱者にも直接、間接に大きな影響を与えるようになってきたという状況がある。少数民族、貧困層、障害者等の社会的少数者・弱者に対する政策として、国内環境の整備状況とはかけ離れた「理想主義的」ともいえる法令が制定されたり、あるいは、現状把握を不十分な統計指標にのみ頼って国連開発計画の指針をそのまま引き写したような政策が実施に移されたりして、社会的弱者・少数者がグローバルな動きに直接翻弄されるようになったのである。こうした状況は、当事者である社会的弱者・少数者にとっては自己の立場、身分、アイデンティティに変更を強いられる可能性もある。本研究は、そうした状況下での彼らのアイデンティティの有り様を明らかにすることを意図したものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、①国内政策のグローバル化」という状況に対応して変動する社会的少数者・弱者のアイデンティティの構築／再構築の動的プロセスと、そこに関わってくる文化的、社会的、物質的、知的資源の意味と役割を明らかにし、多数者／少数者それぞれの生活世界の交錯によって織りなされる現実として社会的少数者・弱者問題をとらえ直すこと、②その方法論の一つとして被調査者との co-authorship の試みを追求すること、③この co-authorship を成立させるプロセスを素材として、知識生産と専門知をめぐる知識生産者とその受け手との間のダイナミズムを探求すること、の 3 点にある。

３．研究の方法

本研究では、南米のチリ・サンチャゴ、パナマ・パナマシティ、ブラジル・リオデジャネイロの３都市に居住する社会的少数者・弱者を調査対象とし、現地調査を通じてこれらの 3 都市に居住する先住民・障害者・貧困層を中心として社会的弱者・少数者へのインタビューを実施すると共に、家庭訪問による彼らの生活実態調査、政策的に彼らと関わっている政府・地方自治体の職員へのインタビューと公的資料の収集を行い、3 都市における政策の現実的様相と社会的弱者・少数者側のアイデンティティ構築プロセスを比較していくこととした。

上記３都市を調査対象とした理由は以下の通りである。チリでは、障害者問題が社会的課題として登場したのが 1990 年代になってからで、1994 年に「障害者の社会統合に関する法律（障害法）」が成立、同時に「国家障害基金」が設立され活動を開始したものの、それ以上の国家的政策は不在のままであった。2000-2005 年に JICA の「チリ・身障者リハビリテーション・プロジェクト」が実施され、プロジェクトの地域リハ部門の成功を受けて、地域リハを中心とした全国政策の試行が 2006 年から始まったところであった。貧困問題に関しては、2002-2005 年に Chile Solidario という貧困削減計画を実施しているが、貧困者の生活世界を十分考慮せず、貧困線を指標とした計画であるため、貧困者は相変わらず貧困である。先住民伝統医療の公認化は保健省の「先住民と保健」プログラム（2000 年）の下、「インターカルチュラル医療」プロジェクトの一環として、また、首都圏東部保健局の 2003 年公表の調査にも裏付けされて実施され、チリ各地の公立診療所内で伝統的治療者の診療が開始されていた。パナマにおいては、先住民人口の 90%が貧困線以下の状態で、貧困政策は先住民政策とも大きく重なってくる。とくに、先住民の医療問題は深刻であるといわれているが、チリほどの動きはなかった。障害者問題については、理想主義的な「障害基本法」が 2000 年に成立したが、2005 年末に就任した新大統領が障害者問題に関心を示したことによって政治課題として浮上した。すでに地域リハ・プロジェクトを成功させつつあったチリとの国際協力が 2006 年から動き出し、チリの状況との比較対象としても適格であると考えられた。ブラジルの都市の貧困政策は、20 世紀初頭から継続的に進められてきたが、その多くがインフラの充実、住宅の提供などの都市・住宅政策的な傾向のもので、住民が求める安定したまともな雇用と教育、そして治安というニーズには応えられていない。

国内政策のグローバル化に積極的なチリ、チリほどではないがグローバル化に接近しつつあるパナマ、そして、独自の政策を維持してきたブラジルの３都市の比較は、本研究の目的に資すると同時に、ひいては「グローバル化」そのものの意味を問い直すきっかけともなると考えた。

役割分担は、武井がチリとパナマ、とくに先住民と障害者について、北森がブラジルの貧困層と障害者について、それぞれ調査を担当した。また、調査協力者として、パナマで

は Andrés Felipe Ramírez（先住民、都市貧困層）と María Teresa Ramírez（先住民）、チリでは Eduardo Sarué（先住民）、Samuel Melinao（先住民）、Gregorio Perez（障害者）、工藤由美（先住民医療）、内藤順子（都市貧困層、障害者）の各氏が調査に参加した。

４．研究成果

研究代表者の武井は、平成 21・22 年度は研究協力者の工藤も、パナマ・パナマシティで先住民、障害者、貧困層について、チリ・サンチャゴ市で都市居住の先住民、障害者、について調査を行った。研究分担者の北森は、ブラジル第２の都市リオデジャネイロにおける「ファヴェーラ」で調査を実施した。研究協力者の内藤はチリ・サンチャゴ市の貧困層居住地区で調査を実施した。

〈先住民〉

先住民に関しては、クナ（パナマ）とマプーチェのアイデンティティ構築プロセスをみると、そこには二つの民族が経験した歴史の刻印が鮮明であること、しかし、人口の多くが都市居住によって故地と切り離され、先住民言語の話者が急速に減ってきていることや文化的実践の減少に対する懸念は共通していること、そして、文化復興と民族的アイデンティティの再確立の核となるものを民族固有のコスモロジーと考えているインフォーマントが多くいることなどが明らかになってきた。

チリでは、19 世紀初めのチリ国家独立後、1860 年代から先住民マプーチェの居住する南部地域を軍事的に征服し（チリ史のなかでは「平定」と呼ばれている）、その後土地所有に関する法律を次々に制定して彼らの領土を国有地化し、植民者に分配していった。その結果、マプーチェは土地を失って最下層の労働者層に組み込まれていく。20 世紀の軍事独裁政権下で、南部の経済的疲弊は大きく、多数の先住民が首都圏州へと流入する。

しかし、都市に移住したマプーチェの中にはメスティソ化していった者もかなりおり、1993 年に先住民法が施行されたときには、マプーチェ固有の姓を持たないために非マプーチェとされた者が数十万に上っている。

パナマでは、チリにおける「平定」と同時代の 19 世紀半ばにダリエン地方から、現在のクナ・ジャラ自治区となるサンブラス諸島へのクナの大移住が起こる。この移住の結果、クナ人は沿岸交易の流れの中に参入することになり、外交的手腕に長けていく。1925 年にはアメリカとの同盟を背景に蜂起して、クナの領土をパナマ国家に認めさせることにも成功している。完成した運河を防衛するために運河地帯に基地群を展開していた米軍の基地労働者としてクナ人が雇用される契約が軍司令官とクナ人首長たちとの間で交わされるなど、クナ人はアメリカとの密接な関係を継続してきた。その後、教育や経済的機会を求めて、基地労働とは別に都市に移住する者が増加した一方、1999 年末の運河の返還と共に基地での雇用は失われた。

都市化というコンテクストにおいてみると、自集団の人々で一つの居住区を形成する傾向にあるクナ人と、チリ人貧困層と混住する傾向にあるマプーチェ人との間では、同様に都市における社会的排除の悩みを抱えながらも、社会的孤立という点ではマプーチェ人の方が多くの問題を抱えているといえる。そこには、固有の領土を確保しておりながら、教育や経済的目的の下に都市に移住してきたクナ人と、土地を奪われてやむなく大都市に移住してきたマプーチェ人という歴史的背景の影響が見逃せない。

そうした都市居住のマプーチェにとって、2000 年以降のマプーチェ民族医療の公認化の流れは、孤立し、アイデンティティを見失いつつあった人々に、マプーチェ・アイデンティティを再構築するための大きな契機となりつつある。シャーマンによる薬草治療や儀礼治療は、自己の祖先たちの叡智を再認識させるだけでなく、マプーチェ・コスモロジーの世界認識の妥当性をも保障するものとなるからである。科学志向の強い社会にあっても、自分の身体的経験に裏打ちされたクライアントたちのコスモロジーの受容は、マプーチェ・シャーマニズムに新たな活気を吹き込んでいるといえる。

マプーチェ医療を提供しているマプーチェ人組織は、自身の組織をコスモロジーに基づいた共同体であると位置づけ、コスモロジーをリーダーシップのあり方、組織の運営、組織成員の行動規範などを示すものであるとしているが、そこでは諸個人の能力の多様性が肯定的に位置づけられるたうえでの組織実践が目指されている。ここでは、コスモロジーは先住民たちの精神的より所、あるいは文化実践の指針である以上に、一つの政治思想として生きられていると言える。

他方、クナ人の場合、彼らの自治領土であるサンブラス諸島の主要な島々には保健省の運営する診療所が置かれており、クナ人医師の勤務するものもある。その一方で、伝統的なシャーマンや薬草師、産婆は減少しつつある。産婆は現在では診療所の医師と協働して、診療所に妊産婦を訪問したりして実践を行っているが、クナの政治的連合体の要人がコスモロジーの重要性を強調するのとは裏腹に、こうした技の継承者は中高年者のみで、次の世代が続いていない。

しかし、クナのコスモロジーで強調されているのは、クナ人の出自とそれに由来する父祖伝来の生き方、そして共同体のあり方の象徴としての「共同体の家」である。とくに後者においては、諸個人の多様性とそれに基づ

いた共同体への寄与貢献という思想が明確に示されていて、マプーチェの事例同様に、コスモロジーが一つの政治思想として成熟しつつあるのが見て取れる。

つまり、先住民運動の中で、コスモロジーが文化復興運動や精神世界を支えるものから、外部の西欧的政治思想に対抗するもう一つの政治思想として立ち現れつつあること、それが彼らのアイデンティティ構築に重要な役割を果たしつつあることを明らかにできたことが本研究の一つの大きな成果であると考えている。

〈障害者〉

チリにおける障害者は 1980 年代までは完全に社会から排除されていたといってよい。これに先立つ 1970 年代後半以降のテレトン運動が徐々に社会の認識を変えつつあったとはいえ、1994 年に制定、施行された障害者の社会統合に関する法律（以下障害者法と略す）によって国家障害基金が設立され、障害者政策への一歩が踏み出されたといって過言ではない。この流れは、2000～2005 年の身体障害者リハビリテーションプロジェクト（JICA）に伴って、保健省内に独立の障害担当部局が設立されたことによって確かなものになっていく。2002 年に実施された全国障害調査結果（国民の約 8 人に 1 人が何らかの障害をもっている）の公表もこの流れに拍車をかける。障害者をめぐる政治的状況はこの 10 年で大きく変化したと言える。

しかし、障害者の個別的処遇や、そのアイデンティティ構築においてはまだ問題も多い。障害と貧困が結びつく割合の高いことも、障害者の処遇の改善が進みにくい理由の一つである。

今回の調査で明らかになったことの一つは、チリにおけるチリ人社会での障害者の処遇とマプーチェ人社会での処遇の違いが、障害者の介護を家族が担う傾向にあるチリ人社会と、複数の家族で構成される世帯が担っているマプーチェ人社会の共同性のあり方の違いに対応していると考えられることで、このことはいわゆるコミュニティベースのリハビリテーションプログラムを立案していく際に考慮すべき重要な新知見であると言える。

パナマの障害者政策は、障害者法の制定・施行が 2000 年であり、それに基づいた実質的な政策が採られ始めたのが 2005 年である。チリ保健省との協力の下で、コミュニティベースのリハビリテーションプログラムが開始され、地方中心に展開されつつある。全国的な影響はまだはっきりしないが、障害者教育やコミュニティ向けの障害教育にも予算が振り向けられたことによって、コミュニティ内での障害者に対する偏見が大きく改善されてきていると語った障害教育担当者もおり、この点は追跡調査が必要であると考えている。

〈貧困層〉

ブラジル第 2 の都市リオデジャネイロの「ファヴェーラ」とその住民、およびチリ・サンチャゴ市の貧困層が多く居住するペニャロレン区とサンラモン区のを中心に調査を実施した。

「ファヴェーラ」とは、狭義には、あくまで住宅群の形態を指すのだが、社会通念的な「ファヴェーラ」は、偏見を含んだ「貧しい人びとが無秩序に住む、危険で好ましくない地域」という意味を持つ。また、多くの先進諸国では、スラムは都市の少数派であることが多いが、ブラジルの都市では、人口の半分ほどを占める大集団である。しかし、彼らは、数の上では少数ではないが、世論を担う主流の人びとから見れば、差別と偏見の対象であり、社会的に劣位にある、いわゆる「サイレント・マジョリティ」である。

リオデジャネイロの歴史においては、ファヴェーラは 20 世紀初頭に出現し、その当初から政府・行政・支配層は、ファヴェーラを公共衛生と治安の面から問題視し、近代化の象徴である都市リオデジャネイロの汚点と見なしてきた。

1900 年代にはすでに、ファヴェーラは公衆衛生キャンペーンの対象となり、1920 年代には、様々な都市化プロジェクトに伴ってファヴェーラ撤去や住民の立ち退きを目的とする政策が取られた。その後も 1930 年代末ごろまで、ファヴェーラは、都市の住宅問題として扱われる傾向にあり、決してブラジルの抱える貧富の格差の結果としては認識されていなかった。1940 年代後半からは、ポピュリズム志向の勢力と、左翼勢力の双方から、連帯すべき「民衆」として注目されるようになる。これは、支配層にとってのファヴェーラが政治的な重要性を持ち始めたことを意味し、ファヴェーラ内のインフラ整備による住民の政治的取り込みが見られるようになる。1960 年代から 1970 年代前半の主要なファヴェーラ政策は、ファヴェーラ撤去政策である。それは、対象ファヴェーラ住民の、郊外や都市周辺地域に建設された団地・低所得者向住宅への強制的移動を意味し、立ち退きに対する抵抗も根強かったが、政府は反対運動を徹底的に弾圧した。しかし、1970 年代半ばになると撤去政策そのものが中止された。1970 年代後半から民政移管される 1985 年までは、政治勢力の拡大を狙いとしたファヴェーラ政策も見られたが、多くはない。数少ない政策の共通点は、ファヴェーラの中のインフラ整備と住民のための基本サービスや医療・教育の提供である。民政移管後の 1980 年代後半以降のファヴェーラ政策は、ファヴェーラを正式な行政区分として認め、住民の

土地所有権を認めることになった。住民は、住民税や固定資産税を納めなければならなくなるが、都市のフォーマルな一員として統合される。道路の舗装、上水道の設置、排水設備の整備、雇用の創出、新築住宅への移動といったことが実現された。また、近年、盛んに実施されているファヴェーラ政策は、ＮＧＯとの連携が多く、ファヴェーラのインフラ整備よりむしろ住民のエンパワーメントや雇用の創出へと重点がシフトしている。

ファヴェーラの住民は、政府の前に常に受け身でいたわけではない。獲得できるものは獲得し、支配層の思惑に反してファヴェーラは増え続けてきた。20 世紀初頭からファヴェーラの数と人口が減少した時期はなく、ファヴェーラは、約 100 年余りの期間を通じてその勢力を徐々に拡大してきたのである。この勢力拡大に大きな役割を果たしてきたのが、ファヴェーラの住民組織である。政府や支配層から、都市の汚点または政治的利用価値の高いものとして見なされてきた彼らは、それを逆手に取って利用してきたのである。本来なら市民に提供されるはずの基本サービス（電気、ガス、上水道、下水設備、医療、教育、舗装道路などの住宅環境）は、ファヴェーラ住民には「自動的に」提供されることはなかった。したがって、彼らは、それら基本サービスを、住民組織が行政に対して粘り強く交渉し、地道な活動を続けることによって、「自力で」手に入れた。さらに、住民組織は、ファヴェーラに政治勢力を拡大し住民の票を得たい政治家との駆け引きも担った。表面的には、ファヴェーラ住民は、モノやインフラ欲しさに票を召し上げられるパトロン依存のクライアントにしか見られないが、実際には、政治家に対して、票田をちらつかせながら自分たちの欲しいモノを交渉し獲得するという手法を駆使しているのである。近年では、国内外のＮＧＯと連携する行政が実施する、ファヴェーラを対象とするプログラムが増えているが、住民組織のリーダーは、いかにひとつでも多くのプロジェクトを自分のファヴェーラに引き込むか、いかにして自分のファヴェーラをプロジェクトの対象にするかという点で、その手腕が問われている。近年のファヴェーラ住民の要求は、基本サービスやインフラ整備だけではなく、雇用の創出やエンパワーメントにあるため、そのような要求に応えられるプロジェクトは、利用価値が非常に高いと考えられている。

ファヴェーラの住民のような「サイレント・マジョリティ」は、受け身的であり「行政が何かをしてくれるのを待っている」人びととして捉えられることが多い。しかし、そのような見方は、支配層中心主義的な見方であると言えよう。表面的には、行政・政府の政策は思惑通りに進展しているように見えるのだが、実際のところは、ファヴェーラの住民が住民組織という集団の力をもって要求を満たし、結果的に、被支配的な地位にいながらにして、その勢力を拡大していると考えられる面もあるのである。

サンチャゴ市の事例については、グローバル化の進行により、多様な言説や出来事（貧困、連帯、人間開発、排除、包摂等々のことば群によって表象され、括られ、善意に満ちた国内外の多数の支援者たちや政策に取り巻かれるなど）のただなかにあって、「様ざまな他者の価値観の間」に生きている貧困者たちのアイデンティティ構築に迫ることを目的とし、暮らしの現場からそれを描きだすことが試みられた。強者の言説空間において語られる 「貧困」「第四世界」「連帯」「排除」など諸カテゴリーや概念にすぎないものが、それらが指し示す現実の対象に暴力的な働きをするということがある。それが弱者のアイデンティティ構築に深く影響しており、その事実と仕組みを考察するため、カテゴリーによって一括りにされたのではわからない貧困者の暮らしぶりや身体配慮からみえてくる彼らの「環(境)世界」から、逆に現代世界をとらえなおすことを試みたのである。貧困者は、発言力の強い「外部」とかかわることで負のイメージを受容しつづけている。そうして「卑屈(humilde)で、貧困を再生産して然るべき良からぬ(bajo, fatal)アイデンティティ」が構築されるのだが、強者はそれを貧困者特有の「心性」として矯正しようとするため、「貧困者」たちは何重もの暴力を受ける事態となっていることが明らかになった。そのうえこの暴力は、善意に基づいた「貧困救済」の名のもとに起こっているため隠ぺいされており、問題はより深刻化・複雑化している。グローバル化の進行する全世界的な問題であるから、研究期間中にすべてを明らかにし、解決の方策を提案するには到底至らないが、本研究を通じて、そうした不可視の暴力の現状をひもとく作業は着実に進み、同時に、以上のような構造にがんじがらめになっている弱者のなかにも、ブレイクスルーの可能性をもつ動きがあることが NGO 調査から明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①武井秀夫　「ケアを考える」『人文社会科学研究』第 19 号、1-17 頁、千葉大学大学院人文社会科学研究科、2009 年 9 月、査読なし。

②内藤順子　「生きる文脈の交錯する開発援助の現場から：「手ぶらで渡り歩く」というアクション」『九州人類学会報』36 号、

5-13 頁、九州人類学研究会・日本文化人類学会九州沖縄地区懇談会、2009 年 7 月。査読有。
③内藤順子　「＜下から＞の人類学的開発援助：チリにおける地域リハビリテーションの実践から」『国際開発研究』17 巻 2 号、77-91 頁、国際開発学会、2008 年 11 月。査読有。
④工藤由美、「ケア論の再考―民族誌的アプローチへ向けて」『人文社会科学研究』第 17 号、183-197 頁、千葉大学大学院人文社会科学研究科、2008 年 9 月、査読なし。

〔学会発表〕（計７件）
①工藤由美　「代替医療と民族医療のはざまで：首都に住むマプーチェの先住民組織の事例から」第 69 回現代人類学研究会『特集：民俗医療の再検討』、東京大学駒場キャンパス、2010 年 4 月。
②工藤由美　「ケアが生成する空間：首都に住むマプーチェ先住民組織の活動から」2009 年度国立民族学博物館共同研究『ウェルビーイング（福祉）の思想とライフデザイン』第 2 回共同研究会、国立民族学博物館、2009 年 6 月。
③内藤順子　「開発援助の成果とは何か：チリの貧困地区におけるプロジェクトの現場かｆら」、国際開発学会第 17 回春季大会、於日本大学藤沢キャンパス、2009 年 6 月。
④内藤順子　「＜第四世界＞の新たな記述へむけて」国立民族学博物館共同研究「生の複雑性をめぐる人類学的研究」研究会、於国立民族学博物館、2008 年 10 月。
⑤内藤順子　「人類学的営為の未知数性：開発援助のローカルな現場で暗中模索する」現代人類学研究会、於東京大学駒場キャンパス、2008 年 9 月。
⑥内藤順子　「トランスローカル・アートの可能性：＜第四世界＞の民族誌へ」、日本文化人類学会第 42 回研究大会、於京都大学、2008 年 6 月。
⑦内藤順子　「貧困に架ける橋：「下からの民族誌記述」へむけて」、日本文化人類学会第 41 回研究大会（分科会「第四世界考：フィールドはいかに記述できるのか」代表：内藤順子）、於名古屋大学、2007 年 6 月。

〔図書〕（計６件）
①内藤順子　「「代替不可能」な個人が出遭う場で：チリの開発援助プロジェクトから」『開発と福祉のフィールドワーク（仮）：未来を育む「支援」ある場で』小國和子・亀井信孝編、世界思想社、2010 年 11 月刊行予定。
②武井秀夫　「開発への参加の一側面―参加者の動機と志向性について」『途上国、伝統文化、そして開発』武井秀夫編（千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第 222 集）、1-15 頁、2010 年 3 月。
③工藤由美、「ルカに集う：首都に住むマプーチェの人々のケアの一形態」『ケアの民族誌のための方法論』武井秀夫編（千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第 221 集）、11-25 頁、2009 年 3 月。
④内藤順子　「＜境界＞づけられた現場をひらく」『＜境界＞のいまを生きる：身体から世界空間へ』荒川歩・川喜田敦子・谷川竜一・内藤順子編、186-199 頁、東信堂、2009 年 3 月。
⑤内藤順子　「「途上国」の相手に教える：チリにおける開発援助の現場から」『アクション別フィールドワーク入門』亀井信孝・武田丈編、112-125 頁、世界思想社、2008 年 3 月。
⑥内藤順子　「ストリートに育まれる身体：サンチャゴの「貧困空間」から」『ストリートの人類学（上）』SER 国立民族学博物館調査報告 81 巻、関根康正編、245-270 頁、2008 年 3 月。査読有。

６．研究組織
(1)研究代表者
武井　秀夫（TAKEI HIDEO）
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：５０２２６９８２

(2)研究分担者
北森　絵理（KITAMORI ERI）
天理大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：４０２７７８７５

研究協力者

Andrés Felipe Ramírez（文化人類学専攻、パナマ：先住民、都市貧困層）

María Teresa Ramírez（文化人類学専攻、パナマ:先住民）

Samuel Melinao（マプーチェ組織リーダー、チリ：先住民）

Gregorio Perez（文化人類学専攻、障害当事者、チリ：障害者）

Eduardo Sarué（キリスト教人文科学大学教授、文化人類学、チリ:先住民）

工藤由美（千葉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程在学、文化人類学専攻、チリ：先住民医療）

内藤順子（日本学術振興会・特別研究員、文化人類学専攻、チリ：都市貧困層、障害者）